**＜文化財の種類**　**有形文化財（考古資料）＞　　追加指定・名称変更**

|  |  |
| --- | --- |
| **旧名称** |  |
| **新名称** |  |
| **員　数** | １０８点（うち既指定６５点、追加指定４３点） |
| **所在地** | 枚方市６番９号　枚方市観光にぎわい部文化財課山田分室 |
| **所有者** | 枚方市 |
| **指　定****年月日** | 平成１８年１月２０日 |
| **指　定****番　号** | 考第５３号 |
| **年　代** | 飛鳥～奈良時代 |
| **説　明**本件は平成17年（2005）度に大阪府指定有形文化財に指定された「百済寺遺跡出土塼仏」65点に、特別史跡百済寺跡から出土した塼仏43点を追加し、108点とするものである。**○百済寺跡の概要**　枚方市所在の百済寺跡は、奈良時代に創建されたと考えられる仏教寺院跡である（図１）。昭和７年（1932）の調査から平成の再整備にかかる調査にわたり大阪府や枚方市によって発掘調査が行われてきた。その結果、建物基壇や礎石などを検出し、百済寺の伽藍配置が南門、中門、金堂、講堂が中軸線上に南北に配置され、中門と金堂にとりつく回廊の内側に東塔、西塔が配置される２塔１金堂式であることが明らかになった。また、講堂の北側には食堂と推定される掘立柱建物跡（北方建物）が確認されている。出土遺物として軒丸瓦・軒平瓦、塼などの瓦塼類、金属製品、堂内を荘厳したと考えられる塼仏片などの遺物が多数出土した。出土した瓦などの遺物から、百済寺は奈良時代後半から平安時代初頭にかけて造営され、平安時代前半に盛行、廃絶したと推測されている（註１）。また、発掘調査だけでなく、『続日本紀』などの文献資料からも百済寺は朝鮮半島の百済の王族であるが建立した寺院であることが推定されている。なお隣接するでは、百済寺周辺で区画された道路跡などが検出されており、百済王氏によって百済寺の周辺が土地区画をもって整備されていたことが明らかになっている（註２）。　寺域は外郭築地に囲繞された範囲であり（図２）、昭和16年（1941）に史跡、昭和27年（1952）に特別史跡に指定され、現在史跡公園として整備されている。西南部のは史跡範囲外のため埋蔵文化財包蔵地「百済寺遺跡」として法的に扱われている。今回、百済寺跡の寺域から出土した塼仏を一括で指定し保護を図るため、既指定の「百済寺遺跡出土塼仏」に史跡範囲内から出土した塼仏を追加指定するとともに、名称を変更する。**○百済寺跡の調査**　百済寺跡の伽藍地にかかる主要な調査および塼仏片が出土した調査について概要をまとめる。　昭和７年に大阪府史蹟名勝天然記念物保存調査會が行った。当該調査が最初の学術的な調査で、百済寺跡の１次調査に位置付けられる。伽藍地の礎石の位置の把握を中心に行われ、伽藍の規模・構造が明らかになった。　昭和40年（1965）には史跡公園を整備する計画のもと大阪府教育委員会により伽藍地の東部分を中心に調査が行われた。この調査により、北回廊や北方建物の詳細が明らかになった。また当該調査では出土層位は不明であるが「金堂仏壇西北から」塼仏片が出土したと報告されている（註３）。　平成13年（2001）に伽藍の西南院地区に当たる百済王神社の境内地（百済寺遺跡）で、拝殿の建て替えに伴う調査が財団法人枚方市文化財研究調査会により行われた。掘立柱建物跡等が検出され、遺物は百済寺で使用されたと考えられる瓦が多量に出土したほか塼仏片65点が出土している（註４）。　平成17年（2005）から平成25年（2013）には特別史跡百済寺跡の再整備事業に伴い伽藍地の発掘調査が５次から13次調査にわたり行われた。伽藍地の西南院地区等一部を除き、主要伽藍や北方建物等において調査が行われ、今回指定する塼仏片の多くは当該調査で出土したものである。**○既指定「百済寺遺跡出土塼仏」の概要（表２、図11）**　平成13年（2001）の調査により出土した塼仏片を一括で府指定にしたもので塼仏の種類としては、小型のとである。漆や金箔が良好に遺存する個体があり、製作当初は金箔が像の全面に施されたと考えられる。いずれも中世の包含層から出土しているが、百済寺で使用されたと考えられる瓦が出土していることや寺域内から出土していること、塼仏の像様から塼仏が奈良時代のものと考えられ、百済寺に伴う資料として当該調査で出土した塼仏片を一括で大阪府有形文化財に指定した。**○今回指定する百済寺跡出土塼仏の概要**（１）出土状況について（図２・３）　今回指定する塼仏片は、昭和40年（1965）に大阪府教育委員会が行った調査と平成17年（2005）度から平成25年（2013）度にかけて枚方市教育委員会および財団法人枚方市文化財研究調査会（平成24年度からは公益財団法人）が行った再整備事業にかかる調査で出土したものである。　再整備事業にかかる調査で、塼仏片は僧院地区の講堂西側や西塔北側付近を中心に出土し、東回廊や西回廊周辺の調査区からも出土した。出土層位はいずれも瓦溜や攪乱土中から出土したもので、寺院で用いられていた当初の位置はとどめていないものと考えられる。片の多くは、講堂西側に集中して出土している。講堂西側には百済寺造営と同時期のものと推定される掘立柱建物跡が検出されており、そこに塼仏が安置された可能性が考えられる。また、昭和40年の調査で金堂跡から出土した塼仏片の出土位置を積極的に評価すると、大型多尊塼仏片は金堂の壁面荘厳に用いられた可能性も考えられる。小型塼仏については、西塔北側で多く出土していることから、塔内の壁面を荘厳した可能性が考えられる。（２）出土塼仏の概要（表１）　百済寺跡からは大型多尊塼仏、火頭形三尊塼仏、、（・塼仏、）が出土しており、その他種別不明の樹木文塼仏も出土している。以下で、塼仏各種について概要を述べる。　大型多尊塼仏（図４・５・６）：19点。図４で示した図様のうち、天蓋宝珠１点、主尊頭部１点・頭光背１点・左腕部１点・脚部から蓮華座１点、左菩薩頭部１点・上半身２点・左脚部２点・脚部から蓮華座１点、右菩薩頭光背から上半身１点、右比丘２点、左天部肩部から右腰部１点・脚部１点、右天部右腰部１点・左足部１点、右１点の部分が確認されている。重複する部位が存在することから、大型多尊塼仏は２個体以上製作されたと推測できる。漆や金箔が遺存する破片がある。大型多尊塼仏は（三重県名張市）や（奈良県御所市）など百済寺跡を含め全国の12か所で出土例および伝世例が確認されており（註５）、それらから像様については部分的に明らかになっている。推定縦約36㎝、横約60㎝に復元されるもので、塼仏の中では大型の種類である。百済寺跡から出土した大型多尊塼仏は、これまでの出土例と比較すると特筆すべき点がある。１つは図像の細部が異なる点である。図像が異なるのは左右菩薩の頭部装飾部分と左菩薩の脚部付近（註６）、図像下端部の須弥壇や図像の左右端部の多角塔が施されない点である。このことから、夏見廃寺や二光寺廃寺出土例とは、型または原型資料が異なるものと考えられる（註７）。このほかにも、型抜き後に部分的な改変が行われており左天部の足部付近にヘラ工具による加工痕が確認できる。２点目は製品が主尊・左右菩薩までの範囲と左右天部の範囲で分割されている点である。その他の出土例ではこの部分の分割は多く見られず、百済寺独自の製作方法であると思われる（註８）。夏見廃寺出土例および二光寺廃寺出土の大型多尊塼仏は、須弥壇部分の向かって右側部分に「甲午年五月中」と造像銘と考えられる文字が記されており、夏見廃寺の創建瓦の年代観等から「甲午年」は持統天皇８年（694）のことと推定されている。このことからこの大型多尊塼仏の型もしくは原型資料は持統天皇８年に製作されたものと推定されている。　火頭形三尊塼仏（図７）：５点。天蓋部分２点、主尊脚部１点・蓮華座１点、右側唐草１点が確認されている。同型の資料から完形の大きさは縦約15㎝、横約10.5㎝であると推定される。火頭形三尊塼仏は、塼の形状を火頭形（舟形）に成形したものである。すでに大阪府有形文化財に指定されている百済寺遺跡出土の火頭形三尊塼仏と同型の資料で、金箔が遺存する個体がある。火頭形三尊塼仏は大きく２種類の型が確認されており、そのうちの１つである（滋賀県大津市）や（奈良県奈良市）から出土した例（註９）と法量及び像様がほぼ同じであることから、同原型資料であると考えられる。火頭形三尊塼仏の年代については、７世紀後半と想定され（註10）、百済寺の創建年代とは大型多尊塼仏と同様に差があり、伝世品である可能性がある。　方形三尊塼仏（図８）：３点。主尊蓮華座１点、左菩薩腕部から腰部１点、左飛天１点が確認されている。方形三尊塼仏は大きく２種類の像様が確認されており、そのうち夏見廃寺で多く出土する方形三尊塼仏Ｂ（註11）と同原型の資料であると考えられる。この方形三尊塼仏Ｂは塼仏の種類では最も広く分布するものである。同型の資料から完形の大きさは縦約21㎝、横約14㎝であると推定される。方形三尊塼仏Ｂの年代については、７世紀末から８世紀に創建された寺院から出土していることから、塼仏についても同様の時期に製作されたものと推定される。　小型塼仏（図９）：９点。二尊および四尊連坐塼仏と考えられる破片が８点、千体仏（多尊塼仏）が１点出土した。二尊・四尊連坐塼仏はすでに大阪府有形文化財に指定されている百済寺遺跡出土の連坐塼仏と一連の資料で、（奈良県奈良市）の（註12）と像様構成が同じものであると考えられる。唐招提寺例が縦4.0㎝、横2.2㎝に対し、百済寺跡出土連坐塼仏の一躯分の大きさが縦3.0㎝、横1.8㎝であり、おおよそ相似形である。このことから百済寺跡出土の連坐塼仏の型は唐招提寺例の段階の製品を踏み返して製作されたものと推定される。千体仏（多尊連坐塼仏）は縦5.0㎝、横3.9㎝が残存する。縦約１㎝の独尊が５段×４列以上配列されている。現在のところ、同原型と考えられる例は確認されていない。　樹木文塼仏（図10）：７点。いずれも樹木の部分と考えられる文様が確認できる。具体的な製作時期や用途については不明であるが、現在のところ百済寺のみで確認される文様である。**○評価**　塼仏は、現在日本では約150か所から出土・伝世例が確認されており、特に奈良県に多く分布し、次いで三重県や滋賀県に集中して分布する傾向がある。大阪府内では17遺跡から出土しているが、今回追加指定する塼仏片を含め、百済寺跡からは先述の６種類108点と、大阪府内ではその種類、出土点数ともに突出したものである。特に今回追加指定の大型多尊塼仏については、現在確認されている出土例・伝世例では同遺跡・寺院で２個体以上確認されている例は珍しく、非常に貴重な資料である。その製作技法について分割の方法が用いられている点、また像様が夏見廃寺や二光寺廃寺の出土例とは異なる部分があり、大型多尊塼仏に２種類以上の型もしくは原型資料があることが確認された点も重要である。　前述の「出土状況について」で記載した通り、寺域内における塼仏の出土地点は、種類ごとにある程度偏在しており、その分布傾向から各塼仏の帰属遺構を推測することが可能であるので、塼仏の用途や当時の荘厳の様相が推測される資料である。また、大型多尊塼仏や火頭形三尊塼仏、方形三尊塼仏の類例では７世紀後半から８世紀前半に創建された寺院から出土するものが多く、百済寺跡から出土した塼仏はやや年代差があり、伝世された可能性をもっている。また多種の塼仏が同一寺院で使用されていたことがわかる点で学術的に重要なものと言える。　以上のように、百済寺跡出土の塼仏は百済寺の性格や大阪府内、日本国内における仏教文化のあり方を知る上で非常に重要であり、本資料は大阪府指定文化財としてふさわしいものと評価できる。既に大阪府指定文化財に指定されている「百済寺遺跡出土塼仏」は、現在の埋蔵文化財包蔵地としての扱いは異なるが、塼仏の種類や寺域から出土していることから、本資料と一連のものと考えられる。よって「百済寺遺跡出土塼仏」に本資料を追加し、「百済寺跡出土塼仏」として名称変更し、指定する。［註］（註１）大阪府教育委員会『河内百済寺跡発掘調査概報』1965、枚方市教育委員会・公益財団法人枚方市文化財研究調査会『特別史跡百済寺跡』2015（註２）財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報27・28』2008（註３）前掲註１大阪府教育委員会1965。夏見廃寺（三重県名張市）出土の方形三尊塼仏と同型式であると想定されているが、再整備にかかる調査の報告では大型多尊塼仏と報告されている。（註４）財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報23』2002（註５）名張市教育委員会『夏見廃寺』1988、廣岡孝信「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報2005年第２分冊』奈良県立橿原考古学研究所　2006、廣岡孝信「奈良県御所市 二光寺廃寺の発掘調査」『考古学雑誌』第92巻第１号　2008、森本貴文編「日本の塼仏集成」『東アジア瓦研究』第３号　東アジア瓦研究会　2013（註６）具体的には、百済寺跡出土塼仏には左右菩薩の頭部装飾に屛の表現がない点、左菩薩脚部に垂飾の表現がない点が夏見廃寺や二光寺廃寺例と異なる部分である。（註７）塼仏の型は、凸型の原型に粘土を押し当て焼しめて製作されたものと考えられる。塼仏型を製作するために用いられる凸型は原型資料と呼ばれる。また、塼仏型から製作された製品でさらに別の塼仏型を製作する、踏み返しが行われる場合がある。（註８）石光寺（奈良県葛城市）では大型多尊塼仏片が１点出土しており、左菩薩腰部付近の部分である。百済寺跡出土例と同様の部分で端部が見られ、分割して製作されたものと考えられる。（奈良県立橿原考古学研究所編1992）（註９）小笠原好彦ほか『近江の古代寺院』真陽社　1989、倉吉博物館『塼仏―土と火から生まれた仏たち―』1992（註10）火頭形三尊塼仏は、僧道昭の活動と関わると推測されており、天武朝を中心とした年代が想定されている（萩原2003）。（註11）名張市教育委員会『夏見廃寺』1988（註12）倉吉博物館『塼仏―土と火から生まれた仏たち―』1992［参考文献］大阪府教育委員会『河内百済寺跡発掘調査概報』1965大脇潔「塼仏と押出仏の同原型資料―夏見廃寺の塼仏を中心として―」『ＭＵＳＥＵＭ』418　東京国立博物館　1986大脇潔「塼仏とその製作年代」『塼仏―土と火から生まれた仏たち―』倉吉博物館　1990小笠原好彦ほか『近江の古代寺院』真陽社　1989葛城市歴史博物館『輝く美の塼仏』葛城市歴史博物館特別展図録第９冊　2008久野健『押出仏と塼仏　日本の美術第118号』至文堂　1976倉吉博物館『塼仏―土と火から生まれた仏たち―』1992財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報23』　2002財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報27・28』2008清水昭博「出土状況からみた塼仏用法の検討」『考古学論攷』第19冊　奈良県立橿原考古学研究所1995中東洋行「河内百済寺跡出土塼仏雑考」『特別史跡百済寺跡』枚方市教育委員会・公益財団法人枚方市文化財研究調査会　2015名張市教育委員会『夏見廃寺』1988奈良県立橿原考古学研究所『当麻石光寺と弥勒仏　概報日本最古の石仏と白鳳寺院』吉川弘文館　1992萩原哉「塼仏」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書第25集―山城国府跡第54次（７XY’UD-4地区）発掘調査報告―』大山崎町教育委員会　2003肥田路美「大型多尊塼仏と法隆寺金堂壁画」『古代寺院の芸術世界　古代文学と隣接諸学６』竹林者　2019枚方市教育委員会・公益財団法人枚方市文化財研究調査会『特別史跡百済寺跡』　2015廣岡孝信「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報2005年第２分冊』奈良県立橿原考古学研究所　2006廣岡孝信「奈良県御所市 二光寺廃寺の発掘調査」『考古学雑誌』第92巻第１号　2008森本貴文編「日本の塼仏集成」『東アジア瓦研究』第３号　東アジア瓦研究会　2013 |